

当館名誉館長井上ひさし氏による、古川が生んだ吉野作造と弟信次の歌と笑いの評伝劇「兄おとうと」がいよいよ公演されます。

公演に先立ち、作者であり当館名誉館長である井上ひさし氏による恒例の「井上ひさしの吉野講座⑭⑮」が開催されます。

「兄おとうと」について、たっぷり二時間半、語っていただく予定です。

「兄おとうと」本公演と合わせてどうぞご参加ください。

企画展 — 「吉野作造と関東大震災」

(十二月十一日まで開催中)

一九二三年九月一日、首都東京を襲った関東大震災。それは自然災害を超えて日本の一時代を画する歴史的転換点ともなった。吉野はこの日大学で地震に遭遇し、大きな衝撃を受けるとともに、その直後より東京各地の被害状況を徒歩などで見聞した。

そして震災下起こった朝鮮人虐殺事件、甘粕事件にも冷静さを失うことなく、事件の本質を見抜き、政府や国民のあり方に疑問を投げかけた。

震災はまた、吉野の人生をも大きく変えた。東京帝国大学教授で

古川市最後を飾る演劇公演、傑作「兄おとうと」は二〇〇六年三月十三日(月)に市民会館にて開催されます。この作品は二〇〇三年に初演され、演出の鶴山仁が読売演劇賞大賞、ピアノ演奏の朴勝哲が同優秀スタッフ賞を獲得しています。今回公演する作品は、二〇〇三年度作品に大幅に加筆した大増補版です。

大正デモクラシーの旗手となった偉大な政治学者吉野作造と、一〇才年下の弟で農商務省に入り大臣を二度務めた凄腕の政治家、吉野信次。兄弟の夫人同士は実の姉妹という点に着目しての歌あり笑いありの評伝劇です。

一見硬く重い内容に見える吉野の生涯と思想を軽やかに、楽しく、そして深い追求のもとで紹介する手法は、井上氏ならではのものといえるでしょう。どうぞこの機会にお見逃しなく。



あった吉野は、震災を機に朝日新聞社へ入社する。これは震災の結果横浜の大富豪が痛手を受け、留学生たちへの援助資金を自らの手で稼ぐ必要にせまられたからである。

しかし吉野と朝日が結びつくこ



吉野作造と関東大震災

とに危機感をもっていた当局により、講演会での発言や新聞記事に掲載した論説で天皇親裁を否定した点が問題とされた。結局吉野の退社を条件に朝日新聞社の発行禁止を免れることが判明、吉野は六月下旬までに退社した。

それ以後吉野は民間の一研究者として活動する。震災下で大量の書籍が消失したことに危機感を抱いた人々を集めて明治文化研究会を立ち上げて、『明治文化全集』を編さんした。これは戦後を通じて近代史研究の基礎資料とされた。また吉野の明治憲法制定史研究を受け継いだ鈴木安蔵は、戦後日本国憲法制定の際、憲法草案を作成した。草案はGHQにより最も自由主義的だと評価され、日本国憲法制定の基礎となった。

花火大会 特別イベント

八月二日(火)

古川の花火大会の日にあわせて、特別イベントを今年も開催しました。「七夕にねがいを…」では、七夕かざり・短冊の作成を行い、それぞれの願いを笹竹に飾りました。「つくってみよう」では、折り紙やペンでうちわを作成しました。「花火の前に名作鑑賞」では「オズの魔法使い」・「道」を上映しました。「ちょっとひとやすみ」ではアイス・ソフトクリームの販売を行いました。夜間は中庭壁面にて「ムーミン」を上映しました。また、当館の屋上で花火を見ることができるよう開放しました。古川市として最後の花火大会ということもあり、今回のイベントを満喫していただけただけなのではないでしょうか。また、七月二四日〜八月二一日まで写真展、古川の思い出「晴と曇―古川の祭と子供の生活」を開催しました。写真を通じて、大正・昭和の古川を思い浮かべて懐かしさをかみしめる人々もいました。

